

# 大学生になるとは

深 草 正 博

## はじめに

ほぼ三十年近く大学の教員をやつてきて、高校から来た学生たちを見ると、まだまだ大学生にはなっていないなど感じる事がしばしばであった。アカデミックな意味で、どうしたら早く大学生になつてもらえるか、いろいろな機会に新入生に向かつて話してきたことを多少アトラランダムになるが、以下にまとめてみたいと思う。

### 一、やらされるのではなく自ら進んでやる

これは何としても、大学生として大前提であるべきものである。今ここに『大学生になる前に知っておきたいこと』という教学社が出している小冊子がある。その中の一節を抜き出してみると、次のように記されている。

高校までの勉強は、教えてもらったことを覚えることが中心なので、受け身の態度でも構いませんでした。大学では、自分で答えを設定し、自分で調べ、自分なりの答えを出すことが求められます。この求められる姿勢の違いは、中学・高校生が「生徒」と呼ばれ、大学生が「学生」と呼ばれることにも表れています。大学生は「主体的に学ぶ」ことが求められているのです<sup>①</sup>。

これはもとより言い古された内容で、私自身も三十年近く学生に言い続けていることではあるが、大学での学びの本質を簡潔に言い表しているとは言えよう。さらに付け加えるならば、カリキュラムをはじめとして大学のあらゆる文章には、大学生の学びは「学修」とされていて、決して「学習」ではないのである。後者は習うことが主軸とされているので、やはり受け身の姿勢が強く出されているのに対して、前者は自ら学び修めるといった主体性が強く押し出されている。

以上にかかわって、大学では「勉強」ではなく「研究」であることも強調したいところである。私自身はかつて高校の教員だったこともあるが、現在でもいわゆる出前授業やオープンキャンパスを中心に、多くの高校生と接して来ている。彼らのほとんどが、勉強とは、教科書や先生に習ったことを記憶し暗記することと思っているのである。私に勉強の最終目標は記憶することではなく、得られた一定の知識を基に（だから全く記憶を否定しているわけではない）、自分の頭で考えることだというと驚く生徒が多い。

大学生になっても、こうした高校までの感覚を引きずっている者が多い。「研究」もテキストや講義内容を記憶することだと思っているのである。そのためには次の節で述べるように、いわゆる教科書に対して、どのような態度で接するかが問題になる。

さて、この節の結論を示せば、「勉強Ⅱ学習Ⅱ記憶」から「研究Ⅱ学修Ⅱ思考」といった枠組みに移行できたとき大学生といえる。

## 二、教科書も一つの仮説

小学校以来高校生まで、教科書は絶対的に正しいと思いこんでいる。<sup>(3)</sup> いわばすり込まれてしまっているといっても過言ではない。これを切り崩すことはたいへん難しいし、そのためには時間がかかる。すなわち、教科書に書いてあることは、現時点でおおよその了解を得ているかぎりでの、一つの有力な仮説にすぎない、ということを認識したとき、大学生になったといえる。

このためには、わかりやすい事例を取り上げる必要がある。私は、国風文化Ⅱ仮名文字成立をその事例に取り上げることになっている。というのも、ごく最近大きな発見があつて、従来の仮説が塗り替えられる可能性が出てきたことと、これまでの教科書の内容を高校生なら十分知っているからである。

まず従来の教科書に載せられている記述を参照しよう。どの教科書もおおよそ似た内容であるが、ここでは、『日本史B（新訂版）』（実教出版）の記述を使用させていただく（ルビは省略）。要点の部分のみ掲げると、次のようなものである。

東アジア諸国で大きな変動が続くなか、危険をおかし、多くの費用をかけて遣唐使を派遣する意味がうすれ、八九四（寛平六）年菅原道真の建議によって遣唐使の派遣は停止された。∴遣唐使が停止され、唐が滅亡すると

大学生になるとは

大陸文化の影響がしだいにうすれ、十世紀には従来大陸文化を消化するなかで、日本の風土にあった優美で繊細な貴族文化がおこった。これを国風文化という。国風文化の形成に大きな役割をはたしたのは仮名文字であった。

これによれば、八九四年の菅原道真の建議による遣唐使の派遣停止によって、大陸文化の影響がうすれ、それによって日本の風土にあった文化すなわち国風文化が成立をしたというのである。その形成に大きな役割をはたしたのが仮名であった。もっと簡単に図式化すれば、「八九四年の遣唐使の廃止↓大陸文化の影響がうすれる↓国風文化⇨仮名文字の成立」となる。多くの大学生に聞いてみても、大体同じ答えが返ってくる。ある意味で非常にわかりやすい論理である。ともかくも起点は八九四年である。

ところがごく最近、平安時代の貴族藤原良相（八二三～八六七年）の邸宅跡（京都市中京区）から、出土した九世紀後半の土器片約二十点に、「かつらきへ」（葛城へ）などの和歌とみられる平仮名が書かれているのが見つかったのである。注目したいのは良相の生存年である。問題の八九四年よりも遙か以前である。この調査にあたった京都産業大学の吉野秋二准教授は、「平仮名の確立は（先の教科書の記述のように―引用者）十世紀といわれていたが、約五〇年さかのぼることがわかった」という<sup>④</sup>。

大変なことである。この事実によって、先のわかりやすい論理は破綻してしまったのである。こうなると、新たに見つかった事実をもとにして、新しい仮説を考えなくてはならなくなる<sup>⑤</sup>。このように考えることが出来るようになれば、大学生になったといえよう。

もうひとつ教科書をめぐって、高校生の感覚の一端を知ることの出来る、私自身の体験を記しておく。先にも書いたように、かつて高校の教員だったときに、バスで毎日通っていたが、ある時教え子と一緒にになり、いろいろな話し

たことがあった。たまたま私の専門の話になり、フランス十七世紀のルイ十四世やそのもとで重商主義政策を推進したコルベールを十年以上研究していると言ったら、「えー、世界史の教科書で一ページ足らずのところを十年もですか」と、その驚きは一樣ではなかったことを印象深く覚えている。おそらく大なり小なり高校生の感覚は似たようなものであろう。世界史のみならずどの教科においても、教科書一冊をマスターすればよいと考えている高校生にとって、「研究」というものがピンと来ないのは当然であろう。こうした感覚の高校生が大学生になったとき、講義で与えられたテキストが高校の教科書と同じであり、この一冊をマスターすればよいと思ってしまうのはいたしかたないとも言える。だから、関係するテキストは無数といってよいほどあるが、教員が選んで提示・使用しているものは、その教員の思想を示すとともに、たつたその中の一冊に過ぎないとわかったとき大学生であらう。

### 三、答えが出ない場合がある

高校までは、問題の答えが必ずあり、それも一つで教科書に書かれているものである。数学などでは、答えにいたる道筋などが多様な場合もあるが、最終的にたどり着く答えはやはり一つであらう。そのように訓練されて大学へ入ってきたものが、答えはそう簡単にでない場合があると言われても、非常にとまどってしまうのである。

しかし、高校の社会系の教科などで、論争を取り上げてそう簡単に答えが出ない場合もありうることを示す実践もある。例えば、正田晴敬氏の「死刑制度を考える」という授業は、そうしたすぐれた実践の一つである。死刑制度に対して「正しい」つまり死刑存続を主張するか、それとも「正しくない」すなわち死刑制度廃止か。前者の主張は次の三点である。(1) 死刑には重大犯罪(殺人罪など)に対する一般・特別の予防効果がある。(2) 被害者遺族の多

大学生になるとは

くは犯人に対して死刑を望んでいる。(3) 国民世論の多くが死刑存置を支持している。他方後者は、(1) 死刑には予防効果はない。(2) どんな理由があっても人の命を奪うことは出来ない。(3) 誤審(冤罪)であった場合、取り返しがつかない、の三点を主張する。詳しい授業経過は割愛するが、この正田実践では、授業の最初には、死刑制度存続主張が二十一名、死刑制度廃止主張が十一名であったところ、最終段階では、前者が十三名で、後者が十九名と、議論の末、廃止を主張する生徒が増えたと報告されている。<sup>(6)</sup>それで氏は次のような結論を出している。すなわち、死刑制度問題は、一般的には事実認識を深めるほど廃止意見に傾くと言われており、高校生にも同様の変化がみられたことは、死刑制度についての事実認識が深まった結果ではないかと。それにしても私の目から見れば、やはりなかなかすっきりとした結論が出せるものではないテーマにもみえるのである。正田氏は、こうした議論によって、社会的価値判断力を養おうとしている。が、むしろこの議論によって、生徒の思考力が高まる点こそ評価すべきかもしれない。私のゼミでも、『加害者家族』という書物を読みながら、<sup>(7)</sup>同様に死刑制度について二時間ほど議論したが、やはり上記の主張のように学生それぞれの言い分があり、どちらか一方の結論は出なかった。高校でこうした授業を受けていれば、大学に入ってそれほど苦労することはないかもしれないが、現実の大学生に接すると、高校でここまで鍛えられているものはさわめて少数である。<sup>(8)</sup>

あるいは異文化に触れると、文化によって同じものを使用しても、意味の異なるものがあり、一義的な答えは出ないということを認識させることができる。よく使う例は、韓国の食事の場面である。ここではご飯は箸でなくさじを使って食べる。また茶碗は(といっても金属製のものが多いが)、手に持って食べてはいけないのである。ところが日本では言うまでもなく、茶碗は手にとって、ご飯は箸で食べるのである。韓国からみれば、茶碗を手にもつのは行儀が悪く、逆に日本では、茶碗を手持たないと行儀が悪いのである。これをどちらが正しいのか、判断できるもの

ではない。両国それぞれの長い伝統のなかから、それぞれの食べ方が理にかなっていると考えられてきたからである。いずれにしても、答えがすぐ出るような問題ばかりでなく、見方が違えば、正反対の考え方もあるということを認識できた時、大学生になったといえよう。

#### 四、問題を見つけることができるか

前に述べたことと重なるが、知識を暗記することに躍起になっていると、そこに何かの課題や問題を発見する力は、全く養えないのではないかと考える。一例をあげれば、いわゆる四大文明についてである。高校までは、文明の名前とそれを養った川の名を挙げるのが出来ればそれで満点であった。すなわち、メソポタミア文明⇨チグリス・ユーフラテス川、エジプト文明⇨ナイル川、インダス文明⇨インダス川、黄河文明⇨黄河、である。これを記憶してしまえば、「勉強」は終わりである。しかしここではここで思考ストップとなつて、何も出てこない。そして、ここが「研究」への分かれ道であると思うが、一歩立ち止まつて考える癖をつけるようになれば、大学生である。すなわち、インダス川に文明があつて、なぜ同じような規模をもつガンジス川にはないのだろうか、と。同様に、なぜ黄河にあつて、もっと規模の大きな長江にはないのだろうか、と。このような疑問から発してか、今日では、長江にはきわめてすぐれた文明が存在したことが明らかになりつつあるのである<sup>(9)</sup>。

こうした疑問の延長線上に、ベトナムのメコン川や、タイのチャオプラヤー川はどうだろうとか、アメリカのミシシッピ川はどうか、という問題関心も生まれてくるであろう<sup>(10)</sup>。

もう一つ、次の文章のなかに、どのような問題を見つけ出せるであろうか。

大学生になるとは

呉興の章苟しょうこうという人が、田を耕しているとき、昼食を入れた容器を道ばたに置いたのを、一匹の蛇が盗み取った。苟が見て怒り、蛇を追っかけると、穴に逃げ込んだ。そして穴の中から聞こえるには「あんなにしつこく追ってきたから、罰として、雷公に頼んで、打ち殺してもらおう」。一たちまち風雨が起り、雷が物凄く鳴り出した。章苟は大いに腹を立て、天に向かって叫んだ、「けしからぬ雷公め。蛇はわたしの弁当を盗み、しかもわたしを天に訴えておる。よし、雷公が来たなら、この鍬くわで撃ち殺してくれるぞ」。すると雷は蛇の穴に落ち、中の多くの蛇を殺した<sup>11</sup>。

どうであろうか。何気なく読み飛ばしてしまいそうである。問題は、最後のところである。雷公をなぜ鍬で撃ち殺せるのであろうか、と考えるようになったら、しめたものである。鍬は鉄であるから、カミナリに感電してしまうのではないかと、現代人なら思ってしまうのではないだろうか。しかし、ここに「陰陽五行説」が深くかかわってくる。すなわちカミナリは、木の芽が春になると振動して出てくるように振動するもので、木火土金水のうち木気と考えられる。ところで、陰陽五行説には、「相生」と「相剋」という二つの相反する法則といってよいものがある。前者「相生」は、木↓火↓土↓金↓水↓木…といった順序で巡るもので、木をこすりあわせると火が生まれるので「木生火」、火は燃え尽きて灰になり、灰は土気なので「火生土」となる等々の関係が生まれる。他方後者「相剋」は、木↓土↓水↓火↓金↓木…といった順序で巡るもので、木は根をはって土をしめつけるので、土気からみれば木気は敵になる。したがって「木剋土」となり、同様に、土は水をせき止めるので「土剋水」となり等々というふうにして、金は木を切るから「金剋木」となる<sup>12</sup>。

さて、この最後の「金剋木」が、先ほどの答えになる。すなわち、鍬は金であり、カミナリはすでにみたように木気であるから、鍬がカミナリを撃ち殺すことが出来たのである。



このように何気なく読み飛ばしてしまうような内容のなかにも、何か問題はないのかと考える習慣が出来たら、大学生になったといえる。

## 五、原典にあたらうとする姿勢

長い間学生をみていても、本を読んでも原典にまで当たって読んでみようとする者は意外と少ない。たとえば、近年はコロンブスを批判的にみる見方が強くなっている。その際に先住民を非常に見下げた存在を示すものとして、『コロンブス航海誌』の次の一節はしばしば引用される<sup>(13)</sup>。

インディオ達は皆裸で歩いており、武器を持っておりませんし、また武器を扱う技術も有しておりません。彼らはきわめて臆病でありまして、千人かかっても、こちらの三人をふせぐことはできないだろうと思われまふ。したがって彼らには、命令を与えて、働かせ、種を播かしたり、その他必要なあらゆることをさせれば、まことに都合が良い者共なのであります。そして彼らに村落を作らせ、衣服をつけて歩くことや、われわれの習慣を教えるべきなのであります<sup>(14)</sup>。

ここに引用された文章だけでは、コロンブスの非常に偏った一面だけが強調される危険性がある。だが、次の文章をみるとちよつと違ったイメージが浮かんでくる。

彼らは愛情豊かで、欲がなく、何事をするにも適しております。私はこの世に彼ら以上に善良な人々もないければ、またこれ以上よい土地もないことを両陛下に証言申し上げます。彼らは、自らを愛するが如くに隣人を愛し、この世で最も美しい言葉で話をし、性は温順で、顔にはいつも笑みをたたえております。男も女も、母親が

大学生になるとは

生んだと同じ状態の裸で歩いております。しかし、両陛下、どうか私の言を御信頼下さいますように、彼らの間では誠によい習慣が保たれているのであります。また、王はすばらしい風格を備えており、その自らを持する態度は見るのも楽しいほどであります。彼らは物覚えがよく、また何でも見てみることを喜びとし、それが何であり、また何のためなのかを問い質します。<sup>(15)</sup>

この二つの文を客観的に眺めてみるならば、およそ別人が書いたようにすら思われるであろう。したがってある本に一カ所だけ引用されているような場合、常に他の箇所ではどうだろうか、と、原典に当たって確かめる必要がある。というのは、しばしば研究者は自分の立論に都合のよいところだけを引用しがちだからである。<sup>(16)</sup>それ故に、原典を自分の目で確かめようと思ったとき、大学生になったといえよう。

## おわりに

以上、五項目にわたって、高校から大学に入って、真の意味で大学生になるとはどういうことかを論じてきた。もとより、私自身は専門が社会科学系であるので、例もそうしたもののばかりであり、理数系の専門家から見ればいかにも不十分であろうことは、重々に承知しているつもりである。どうかそのような観点からもご叱正いただきたいと思う。ただ、理数系においても仮説の重要性は周知のことであるし、私が素人ながら関心をもっている宇宙論なども、分らないことだらけで、「超ひも理論」や「ビッグバン宇宙」「インフレーション宇宙」など様々な仮説によって宇宙の構造が探求されているのではないだろうか。<sup>(18)</sup>そのような意味で、両者相通じ合うところがあると感じているところである。いずれにしても、高校生を大学生にどう育てるかは、今後大学において、今まで以上に重要性を帯びてくる

と思われる。本稿がそのようなことを考えさせるたたき台となれば幸いである。

## 註

- (1) 世界思想社教学社編『大学生になる前に知っておきたいこと』教学社、二〇一〇年、十八頁。傍点は引用者。
- (2) 「教科書」と言う、絶対に正しいといったイメージがまわりつくので、私は大学ではあえて「テキスト」と学生には呼ばせている。
- (3) 高校まで、子ども達は「教科書絶対・教師絶対」という感覚でいることについては、拙稿「創造性教育論」『皇學館大学教育学部研究報告集』第三号、二〇一一年、所収、四頁以下参照。そこでは「二つの絶対からの自由」という形で論じた。
- (4) 『中日新聞』二〇二二年、十二月二十九日、朝刊。
- (5) 仮説再構成については、とりあえず拙著『環境世界史学序説』国書刊行会、二〇〇一年、八頁以下を参照されたい。なお、私自身の仮説を簡略化して示せば次のようになる。すなわち、ちょうど現在のアメリカを中心とする経済のグローバル化によって世界各国の人々のアイデンティティ・クライシスがもたらされ、自己のよりどころを自文化にもとめようとするように、唐の国力は衰えの兆しを見せ始めたとしても、民間を通じて唐経済が日本を圧迫してくる状況の中で、アイデンティティ・クライシスを感じた人々が、そのアイデンティティの模索を通して国風文化を成立させたのではないかと。これについては、拙稿「歴史学習(4)……歴史学的研究」全国社会科教育学会編『社会科教育実践ハンドブック』明治図書、二〇一二年、所収、一一三～一一六頁参照。
- (6) 正田晴敬『社会的価値観形成の公民教育授業開発研究』第一学習社、二〇一一年、九十三頁。
- (7) 鈴木伸元『加害者家族』冬舎新書、二〇一〇年。

大学生になるとは

- (8) M・サンデルの『これからの「正義」の話しよう』（早川書房、二〇一〇年）の中にも、そう簡単に答えは出ない道徳的ジレンマが多く載せられており、非常に参考になる。
- (9) これについては、次の書物を参照されたい。徐朝龍『長江文明の発見』角川選書、一九九八年、梅原猛、巖文明、樋口隆康『長江文明の曙』角川書店、二〇〇〇年、など。
- (10) J・M・バーダンの『ミシシippiアメリカを生んだ大河』（講談社選書メチエ、二〇〇五年）は、先住民との関わりについてはそれほど多く論じられていないが、それでも参考になる書物である。
- (11) 竹内照夫『干支物語』現代教養文庫、一九七一年、一八一頁。ルビおよび傍点は原文。
- (12) 以上については、吉野裕子『カミナリさまはなぜへそをねらうのか』サンマーク出版、二〇〇〇年、二十八～五十二頁、参照。
- (13) たとえば、大澤正道『ヨーロッパ・帝国支配の原罪と謎』日本文芸社、一九九〇年、九十四～九十五頁。ここでは、「インディオは白人と対等の人間では決してなく、白人に仕え、白人に強化されるべく生まれた動物」と説明されている。
- (14) 林家永吉訳『コロンブス航海誌』岩波文庫、一九七七年、一四五頁。
- (15) 同、一七三頁。
- (16) もとより、だからといってコロンブス以降のヨーロッパのあり方を批判する視角を、私が失っているわけではない。これについては、拙著『社会科学教育の国際化課題』国書刊行会、一九九五年、十八頁を参照されたい。
- (17) そのような観点から、私は早くから板倉聖宣氏の「仮説実験授業」に関心を抱いてきた。小学校段階からこうした授業がおこなわれれば子ども達の認識も大いに違ってくるのではないだろうか。板倉『仮説実験授業入門』（明治図書、一九八九年）および前掲拙著『環境世界史学序説』十三～十四頁、参照。なお次の書物も一読の価値はある。竹内薫『99・9%は仮説』光文社新書、二〇〇六年。
- (18) 磯部琇三『宇宙はこうして発見された』KAWADE夢新書、一九九七年や竹内、前掲書、一七一頁以下。